

# 教育研究所だより

No.228 令和4年3月24日 【発行者】守山市教育研究所 所長 脇阪 久徳  
守山市勝部三丁目9番1号(守山市生涯学習・教育支援センター 愛称:エルセンター 3・4階)  
TEL:077-583-4217 FAX:077-583-4237  
E-mail:kyoikukenkyu@city.moriyama.lg.jp  
HP:http://www.city.moriyama.lg.jp/kyoikukenkyu\_index.html

## 教育相談を進めるにあたって ～こたえは子どものなかにある～

守山市教育研究所教育相談専門員 西川典子

「朝、起きられません」は誰にでも起こることです。しかし、それが「登校しようとする」となると頭が痛くなったりお腹が痛くなったりするんです」につながってくると要注意です。掘り下げていくと「人が苦手で、人前になると緊張してしまって」といった思いが見えたり、「集団がしんどい」という思いが見えたりします。

教育相談に来られる保護者の中には、子どものつまずきを「家庭環境のせいだ」「しつけ方がわかったのではないか」と思い悩んでいる方もおられます。

このような子どもたちや保護者と向き合う時に心がけていることがあります。それは、よく「きく」ことです。「話を聴くなんて当たり前じゃないか」と反応する方が多いと思いますが、誰でも人はつい話してきかせようとしたり思いを押し付けたりするところがあります。しかし、こたえは子どもの中にあるのです。それを取り出さなければなりません。それは、よく「聴く」ことです。

「傾聴」という言葉がありますが、教育相談では、まさに「心を傾けて聴く」ように努めます。相手の傍らに居て、みて、感じて、寄り添うことから始め、時間をかけてゆっくり心を溶かしていきます。丁寧かつ誠実に耳を傾け、語ることにうなずき、「そうなの」「たいへんだったね」「〇〇がいいね」と応えます。相手の気持ちを汲み取り、話の中の場面を思い描いたり、感情や経験を自分自身のことと受け止めたりしながら、心の内を感じ取るように接しています。その子に寄り添い、一緒に見て一緒に感じ、語り始めようとするのを待つことが大切です。

この聴き方は「共感」や「受容」につながります。教育相談を進める中で、子どもや保護者の話を自分事と捉え、しんどさや困り感を一緒に感じていきたいと願っています。ただ、それが「できる」というと尊大ですし、「こういうことですよね」と安易にまとめることは不遜です。教育相談に携わる私たちは、思い込みや決めつけを排除し心を平らかにして受け止め、子どもが何を言おうとしているのかを聞き分け、何をしようとしているのかを見分けることを大事にしています。

子どもの悩みや不安は様々です。したがって、それがもととなって生じる不適応にもいろいろな形が見られます。しかし、自分の気持ちや今までの頑張りを親身に受け止めてもらえると、前に一歩踏み出そうとする力が少しずつ生まれてきます。「できる」を実感することや成果を味わう体験を積み重ねていくことは、大きな自信につながります。

聴くことで心をほぐし、ただ、それをゴールにするのではなく、悩みのループに陥り動けなくなってしまった子どもに社会的自立を促すこと、またそのためのエネルギーを高めていくことが教育相談のめざすところです。

小さなサインやSOSを見逃さないように注意しながら、「いつも応援しているよ」というメッセージを送り続けること、その積み重ねでよく「効く」教育相談になればと願っています。



## <指導力向上に関する研究1>

### “児童がプログラムを作成する”授業実践

#### —プログラミング教育で育む資質・能力の向上—

担当：研究員 天沼 翔太

本研究では、“児童がプログラムを作成する”活動を取り入れた授業の実践調査やその検証を行い、本市における効果的なプログラミング教育の在り方について探りました。授業を考える際には、小学校プログラミング教育で育みたい資質・能力（知識および技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等）をどのように育むのかを考えました。

授業後の児童の振り返りには「こういうのをしたら九九がおぼえられたんだな～と思いました」「にがてなかけ算が楽しくなった」「他にもこんなプログラミングゲームを作りたい」といったプログラミングの有用性に気付くような感想や、もっとプログラミングがしたいという感想がありました。また、「ノートに書くときは『n』は一つ、パソコンで打つ時は『n』を2つうたないといけない」などの振り返りもありました。“児童がプログラムを作成する”活動を効果的に取り入れることによって、プログラミングの有用性に気付き、活用していこうとする態度を涵養することにつながり、さらに教科の中でプログラミング教育を行う場合は、教科の学びを深めることにもつながるとわかりました。



## <指導力向上に関する研究2>

### より多くの子の目が輝く、学級づくり・授業づくりの創造をめざして

#### —ユニバーサルデザインの考えを取り入れた実践の工夫—

担当：係長 中道 裕恵

本研究では、特別な支援を必要とする児童生徒を含めたより多くの子どもにとって、生活しやすい学級づくりや分かりやすい授業づくりの推進を目的とし、「ユニバーサルデザインの考えを取り入れた学級づくり・授業づくり実践ハンドブック」を作成しました。このハンドブックには、市内先生方の優れた実践を掲載しており、令和4年4月、市内小学校を中心に配布する予定です。

ユニバーサルデザインの考えを取り入れた実践は、特別な支援が必要な子どもにとって分かりやすいだけでなく、結果的にクラス全体の子どもにとって分かりやすい指導につながり、学級全体の学びを豊かにしていくことにもつながります。

本ハンドブックの活用を通して、より多くの子どもが安心して過ごせる学級づくり、「わかる！できる！」と感じられる授業づくりに生かしていただけたらと思います。



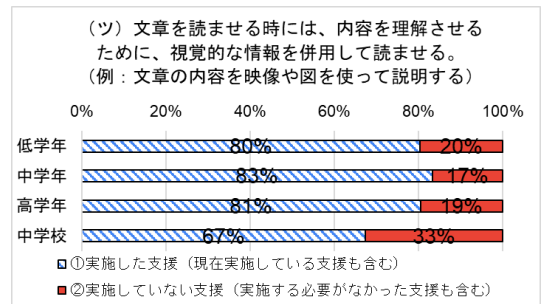
## <教育に関する調査研究>

### 通常の学級における特別な支援を必要とする児童生徒への支援のあり方についての調査

担当：研究員 天沼 翔太

本研究では、通常の学級担任の先生方に、発達障害のある児童生徒やその可能性のある児童生徒（以下【特別な支援を必要とする児童生徒】）への授業に関する具体的な支援のあり方に関するアンケート調査を行い、本市の特別支援教育における支援のあり方について現状を探りました。

アンケートでは38項目の支援例に対して、今年度支援を実施した（実施している）かについて回答いただきました。支援例の中には、小学校低学年から中学校まで、大差なく実施した（実施している）支援がある一方、右の図のように、小学校では各学年で大差なく実施しているが、中学校では実施していると回答した教員が10%以上減っているものがありました。このことから、小学校と中学校の連携をさらに強め、効果的な支援が継続的に行われるようにする必要があると感じました。



また、こちらが提示した38項目の支援例の他に、効果的な支援として108の支援例が集まりました。効果的な支援の内容には、「褒める」「認める」といった語句が多く挙げられ、できなかったことや不得意なことに着目して指導するのではなく、できたことや得意なことを褒め、言動を認める受容的な関わりが有効であるとわかりました。